

■前は電柱の名前「見返」から、東大泉7郵便局付近に1950(昭和25)年から「みかえり大泉寮」(約二千坪)という母子寮があったことを紹介しました。今回はその施設の歴史を詳しく知る方からお話を伺い、昔の資料をもとにお伝えします。

■実はこの「みかえり寮」、母子寮の前は、戦後になって海外から引き揚げてきた人のための「大泉帰農訓練所」として、さらに戦前は満州(現在の中国東北部)に花嫁を送り出す施設「東京市立大泉女子拓務訓練所」という名前で、農作業訓練の場として使われていたのです。

■お話を伺った関場弘子さんから、夫の昭徳さんが残した貴重な手記をお借りし、ここに一部転載させていただきます。

◆東京都経済局の大泉帰農訓練所が新しい父の職場となり、同じ敷地内にある官舎に住むことになりました。現在は東大泉七丁目三十五番地と思われ、まさに井頭公園は三十四番地ですすぐ隣に該当します。小学四年生から高校一年生の夏まで過ごしました。

◆かつての大泉は田畑がかなりありました。田植え、田の雑草取り、脱穀、モミすり、精米、冬は麦踏み。その頃になると強い春風が吹いて畑の関東ローム層の土が舞い上がり、一面畑は砂漠の砂嵐のような状況で目が開けていられなく、歩行が困難な季節を迎えるのでした。

◆夏休みの遊びは葦を束ねて筏(いかだ)を作り、当時、池と川を区切っていた井頭橋の下を川下りすることでした。しかし筏はすぐにくずれてしまうのでした。

■また、1943(昭和18)年に設立された「大泉女子拓務訓練所」については、『身近な地域で学ぶ戦争と平和』(今井忠男編著)に、当時指導員だった隅春吉さんの、こんな言葉が載っています。

◆東京都が全国から募集した一八歳から二五歳の女子で、三〇～四〇人ぐらいが半年から一年の合宿訓練を受けていました。農業実習地は学校のすぐ下

(東大泉7丁目35番地付近、白子川べりの傾斜地)の面積七反の水田と畑二町五反を農家から借りて、夏はかぼちゃ、大根、西瓜、春は麦などを作っていました。夏には数人の生徒を連れて近くの農家に麦刈りなどの手伝いについて大変喜ばれました。

◆俗に「大陸の花嫁」学校と呼ばれたのは、満蒙開拓団員のお嫁さんを養成する施設だったからです。満州からは開拓団の団長が結婚相手の男子の団員を引率してきて、講堂で合同結婚式を挙げました。お互いに事前に写真と手紙だけでお見合いを済ませているのですが、相手がうまく見つからない女子は訓練所

に一年くらい残っていました。

■果たしてこの娘たちはその時、どんな思いで白子川の流れを見たことでしょうか。このようにしてここを巣立っていった「大陸の花嫁」たちがその後それぞれに、大変な運命をたどることになったことは、様々な証言の語るころです。胸がふさがる思いがします。

■いつのまにか電柱の名前から、戦争に巻き込まれた人々の暮らしの歴史まで話がさかのぼってしまいました。失礼しました。(了)

(東谷 篤)



昭和24年頃 農作業訓練



昭和24年頃 家畜飼育実習